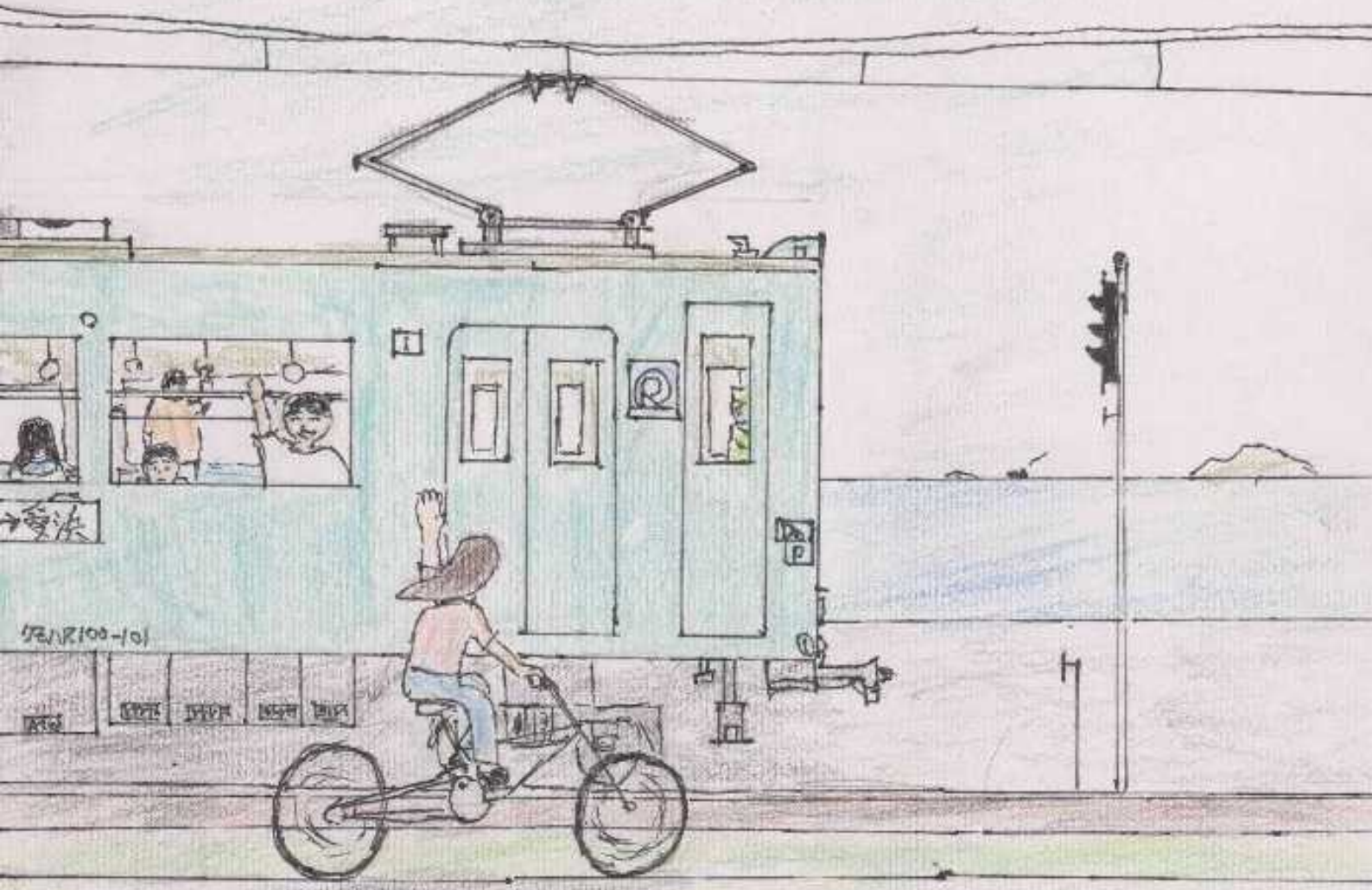
そよかぜ

—SoyokAZE—

亀山茂則・編



そよかぜ　――SOYOKAZE――

亀山茂則（かめやましげのり）・編・文

茂則（しげのり）BBS・文
（http://sigenori.bbs.fc2.com）

荻鉄出版

目次

1. 品急の１日　快速急行＆亀山茂則作
2. 有人改札最後の日～ありがとう、駅員さん～　亀山茂則作
3. 駅員の一日　快速急行作
4. 恵理、お早う～夢電＆市立夢ノ浜高校の愉快な事～　快速急行作
5. ～初めての 160km/h～　Gordon 作

おことわり

この本の中に登場する人物、および団体は、
すべて架空のものであり、
実在の団体・人物等には一切関係ありません。

又、出来るだけ原文を載せるよう、努力をいたしておりますが、
差し支えのない範囲で、一部校正をしております。
何卒、ご了承ください。

途中で打ち切り状態になっている作品は、
一部作品のみ、加筆してあります。

（編集長　亀山茂則：文）

品鉄の１日　作：快速急行＆亀山茂則

枕「ﾌﾟｰーーーーーーーーーーーー」
谷山「うぎゃ」
そう。ここは河和運輸区。運転士の谷山達彦(たにやまたつひこ)が起床する時間である。
谷山「ふう・・・」
「ガチャ」
運輸課のドアを開けた途端
運輸課のみんな「おはよーーーーーーーーーーー」
谷山「ｳﾋｬ、どうしたw」
点呼係「あ、谷山さんおはようございます。」
谷山「うむ。おはよう。点呼をするから待っててくれ」
点呼係「はい。」
谷山は乗務手帳に今日の徐行区間などを記録した。
股尾「あー谷山じゃないか！！久しぶり！！」
谷山「お前は・・・たしか品快へ行ったんじゃなかったけ」
股尾は以前事故を起こして品快へ行っていた。今回は品快から派遣で品鉄へ来ている。
谷山「そっか・・・事故起こすなよ」
股尾「わかってるって」
暫くして
谷山「本日 01 行路乗務！無事故無違反で頑張ります！」
点呼係「はい。いってらっしゃい。」
運輸区のドアを開けた。
そして車両が止まっている 1 留置線へ。
谷山「よっしゃあ！！」
そこにとまっていたのは、105 系だった。
高山「あーおはようございます、本日車掌をやらせていただきます、高山です。」
谷山「こちらこそ、お願いします」
今日の車掌は、セクシーボディに車掌かばんが目立つ高山志乃車掌だ。
乗務員室へ乗り込んだ。
運番表示機を「01」にして、行先も設定しようとした途端
スピーカー「ｶﾞｰビー」
谷山「・・・・・・・・」
高山「・・・・・・・・」
高山「あ、音量最大になってました・・・」

高山はまだ入社間もない女性車掌なので、こういう慣れないのだ。
谷山「出発停止！入信進行！オーライ」
谷山は105系の独特なマスコンを一段、入れた。
谷山「・・・はてな。」
ポイントがこっちを向いていなかった。
谷山「・・そっか、ここは発条式だった。」
発条式とは、発条転轍機のことで、いわゆる「スプリングポイント」である。
定位は本線なので留置線には向かない。
そしてポイントへ差し掛かった。
105系「ガツン」
谷山「？」
と思うままに
谷山「・・・うわあああああああああ」
高山「きゃあああああああああああ」
谷山はここから目を瞑ってしまった。
しばらくして目を開けた。
谷山「・・・な・・なんじゃこりゃー！」
高山「うう・・・・」
谷山「高山！たかやま！」
あのとき一番後ろの車掌室にいた高山が、いつの間にか谷山の横で横たわっていた。
谷山「高山！！！高山！！！」
高山「た・・・に・・やま・・・さ・・・ガクッ」
「彼女は死んだ。」
谷山「た・・・高山ぁ！！！！！」
谷山「た・・・高山ぁ！！！」
彼女は、乗務員扉に頭を強打し、その反動で足が持ち上がり窓にぶつけ。そして息絶えていた・・・
谷山「こ・・こりゃたいへんだわさ」
駅員「おーい」
谷山「こりゃたいへんだ、車掌の高山が死んでるぞ」
駅員「えーこりゃ大変だ、すぐに救急車を呼ぶぞ」
谷山「うん。すぐ呼んでくれ」
谷山は河和駅の駅長室で事情聴取された。
やがて終了し、つかれた谷山は駅の仮眠室で寝てしまった。
夜中の1時。なぜか起きた谷山はトイレへ行こうとした。そのとき、谷山はギョッとした。
死んだはずの高山が、切符売り場に立っていた。

谷山「お・・・お前は・・・」
高山「谷山さん。」
谷山「お・・・まえは生きているのか・・・？年は・・・？」
高山「18 です。」
谷山「なに？たしかあいつは 23 だったような・・・」
谷山はひらめいた。
谷山「きっとこれは夢だ・・・」
そのとき、体を揺さぶられた。
駅員「谷山さーん、朝ですよー！」
谷山「う・・うーん」
目の前に高山が見える。
谷山「高・・・山？」
いや、それはすごく顔の似た股尾愛理香だった。普段、彼女はたわら駅勤務だが、出向で河和駅にきている。
愛理香「ふふふ。」
「ふふふ、変な谷山さん。」
眠い目をこすり、谷山は愛理香の方を見た。
「愛理香か。どうして指令所に？」
「谷山さん、点呼の時間ですよ。後 5 分もありませんよ。」
谷山は愛理香がたわら駅から出向で来ていて、そして昨日の晩、愛理香に起こすように、頼んであって、今の時間がかなり大変だということを思い出した。
「ヤバイ、急がなきゃ！」
谷山は目にもとまらぬ速さで布団を畳み、急いで制服に着替えて、運輸課へと向かっていた。
「おはようございます。」
「おはよう。」
ギリギリ間に合った。谷山はほっと、一息ついていた。

点呼が始まった。昨日と同じく、徐行区間があるらしく、それを忘れぬよう、谷山はいつも携えているメモ帳にメモを取っていた。

点呼が終わり、いつもの様に 1 番留置線へ向かった。1 番留置線には、彼の相棒 105 系ではなく、乗り入れ先の荻沢電鉄に所属している N200 系が止まっていた。
<初めて乗るな・・・この車両（くるま）・・・>
それもそのはず、昨日初めて乗り入れがスタートしたのだから。
「たっにや～まさん！」

後ろから今朝起こしてくれた声がした。
「愛理香！？どうしてここに？」
普通、駅務係である愛理香は留置線に来るはずがない。何らかの理由があるはずだ。
「今日は、たわら駅に帰るので、この列車乗ってくれ、と言われたので、来ました。」
そんなこと聞いていない、と谷山は言おうとした。しかし聞き逃している可能性もある。
念のため、駅に携帯で電話を掛けた。
プルルルル・・・・ガチャ。
駅員「はい、河和駅です。」
谷山「もしもし・・・あのぉ～股尾愛理香駅員はあれに乗ってたわら行くんですか？」
駅員「えー。そうですよ。」
谷山「そうか・・・有難う」
駅員「どういたしまして。」
ガチャ。
谷山「やっぱりそうだったのか。」
しょうがなくN200の運転席へ行く。
いつもの谷山はこのあと行先、運番などを設定する。
谷山「あれ・・・・」
谷山は驚いた。
105系は、運番、行先の設定方法が手動なのに対し荻鉄N200系の設定方法はスイッチなので楽にできた。
またまた驚いた。105系はツーハンドル自動空気ブレーキなのにN200系はワンハンドル式だった。
谷山「ｳﾋｬぁすごいなあ」
なれないN200系で河和駅へ進入した。
ドア「プシューガラガラガタン」
谷山「ご乗車ありがとうございます。たわら方面地下鉄線直通の本郷田原行きでございます。」
尻押し隊「ご苦労サンデーっす」
谷山「おう、がんばれ。」
尻押し隊とは府立品岡高校の生徒が登校前のわずかな時間に混雑した電車にドアを閉めようと必死に尻を押す部隊。(違
谷山「順に中ほどへお進みください！！」
ドッガラガッシャーーーン
谷山「！？！？！？！？」
愛理香「あっ、あれ！！」
谷山「なにいい」

隣の 2 番線を発車しようとした品岡行き普通電車がポイントで脱線したのだ。
谷山「まさか・・・あれは股尾の乗務じゃ・・・」
愛理香「お・・・お兄ちゃん・・・」
谷山「ま・・・たお・・・」
愛理香「お兄ちゃん！！！！！！」
股尾「え・・・えりか・・・」
愛理香「お兄ちゃん！！！！」
谷山「股尾・・・」
股尾は生きていた、数分後に品快へ転属された。
時は既に 23 時。仮眠をとることにした。
谷山「ぐうううううう・・・」
目覚まし「ビィーーーーーーーーーーーーーーーー！」
谷山「うぎゃあああああああああああああ」
カチ。
谷山「ふう、耳が破れるかとおもったあ」
今日は非番だが、せっかくなので品鉄に乗ることにした。
アナウンス「1 番線の電車は、荻沢電鉄線直通、新荻沢行き急行です。」
谷山「あああっ」
その電車の運転士の名札には、
　「運転士　高山」
と、彫られていた。
谷山「まさか・・・」
「高山早智子」
あれ？
高山早智子「どうしましたか？」
谷山「あのーあなたの妹か姉に高山志乃って人いますか・・・」
高山早智子「ああ、私の妹で、事故で殉職したんですよね」
谷山「私、志乃さんが最後の乗務となった列車の運転士です。」
早智子「**えええ**」
早智子は驚いた。まさか、妹が殉職した時に一緒に乗って
かばんの名前を確認した。いた運転士がここに立っているなんて・・・
「それで、志乃は・・・」
谷山は話すことを一瞬、躊躇したが、ここは話すべきだと思い、ありのままを話した。
「志乃さんは、私がハンドルを握ってあそこの引き上げ線から出庫したとき、叫び声がしたのです。そして、私はその声に驚いてしまって、一瞬目を瞑ってしまったのです。そして、私が目を開けたとき、志乃さんが私の横に横たわっていたのです・・・」

そこまで、谷山が言うと、早智子は、「もういいです」と目で、そう言った。何せ、出発時刻が近づいていたからである。
「では、私は客席に・・・」早智子の言葉がさえぎった。
「運転席に乗ってください！」
谷山は一瞬、躊躇した。しかし、断る理由も無い。運転席に入り、助士席に座った。

トゥルルルルルルル・・・

『間もなく、１番線から、急行、荻沢電鉄線乗り入れ、新荻沢行きが発車します。ドアが閉まります、ご注意ください。』

ドアが閉まり、運転台の確認ランプが点ると、早智子は、一段ずつ、ノッチを上げ始めた。ジョイント音の鳴る間隔がだんだん短くなっていく。１０５系は、その老いた身体で、河和の地を、颯爽と走り始めた。

『本日も、品岡急行電鉄をご利用いただき、誠にありがとうございます。この電車は、荻沢電鉄線直通、新荻沢行きでございます。停車駅は、倉野瀬、西東風ヶ丘で、西東風ヶ丘から先は、各駅に止まります。次は、倉野瀬、倉野瀬です。倉野瀬航路をご利用のお客様は、お乗換えです。』

車掌が、肉声で停車駅を放送し始めた頃、運転席では、谷山が早智子と話をしていた。
「谷山さん、そう言えば、どうして今日は駅に？」
「少し、気晴らしに、とでも言っておきましょう。なんだか、乗りたくなりましてね。」
本当は違う、と言いたかった。谷山は志乃が目の前で亡くなったショックから少しでも逃れるため、遠出をすることにしたのだ。
「そうですか・・・では、どうして制服で？」
「どうしてって、言われましても・・・」
谷山は口をつぐんでしまった。なぜか、言いたくなくなった。
「無理に言わなくても、大丈夫ですよ。」
谷山は、そんな早智子の思いやりに、心が暖かくなるのを感じた。
そんな二人を乗せた 105 系は、駅に止まりながら、一路、西東風ヶ丘を目指した。
『まもなく、倉野瀬、倉野瀬です。お出口、右側です。』
早智子は、１㎜の狂いもなく、105 系をホームに止めた。
ドアが開き、客が降り、そして乗った。そして扉が閉まった。
そして、出発した。
「ぼーっ」

ふと、海を行く連絡船の汽笛が聞こえてきた。谷山は、気がついた時には、出航する船に手を振っていた。
早智子は、徐々に速度を上げていった。

速度が 60km/h まで上がった瞬間、
「うっ・・・」
早智子が気絶した。
「高山さん！」
悪夢が、繰り返された、そう感じた。しかし、呆然としている暇は無い。咄嗟に、早智子を助手席に座らせ、谷山はハンドルを握った。
見ていた乗客は、何が起こったのか分からず唖然とすると同時に、少しばかりの安心感が生まれてきた。
そんな乗客の心境など知らぬ谷山は、ただ独り、焦っていた。悪夢が繰り返された。あの日の情景が、蘇ってくる。

『キャァァァァァ！』

ううん。嫌だ、こんなことになるはずなんて・・・心配していると、早智子の意識が、戻ってきた。
「ううう・・・」
「高山さん、大丈夫ですか？」
「・・・？」
その目は、自分が意識を失っている間に代わりに運転してくれた同僚に対する目ではなかった。
「・・・谷山さん？」
谷山は驚いた。その話し方、訛りには聞き覚えがあった。
「・・・高山？」
亡き志乃の喋り方にそっくりだったのだ。
「谷山さん、あの時は・・・」
早智子は涙を流していた。
「ありがとうございました。これが伝えたかったこ・・・と・・・」
早智子がまた倒れた。
「早智子、早智子！」
「はい？」
少し驚いた顔で早智子は谷山を見ていた。
「これで、肩の荷が下りました」

谷山は、微笑んでいた。

改札最後の日～ありがとう、駅員さん～　作：亀山茂則

ガチャッ！
「ファーア」
始発前の見晴市駅構内に、大あくびが響く。今日はこの駅の改札に人が立つのも、最後になる。さっき大あくびをした、見晴市駅員の西崎も、改札に立つのは今日が最後。目の前にあるアルミ製の土台は、今日の終電後に取り付けられる自動改札機の土台だ。置き場がないので、宿直室に置かれているのだ。

「今日で、“アレ”も最後か・・・」
あれというのは、今まで開業から毎日、欠かさず行われてきた改札の業務である。制服に着替えた西崎は、手袋と改札スタンプを持って、改札口に立った。

プア～ン

一番列車の汽笛が聞こえてきた。

しかし、誰も改札口には来ない。

数分が経った。

暇を持て余していた西崎の目の前に、懐かしい硬券が差し出された。

硬券？ああ、そういえば“アレ”があったか。

“アレ”というのは、今日だけ発売されている、見晴市市駅から荻沢、東風ヶ丘中央までの区間までの硬券切符で、名前が「有人改札謝恩切符」だ。それを出してきたようだ。

「すみませんが・・・」

その切符を出してきたお下げ髪のセーラー服の少女が、早くしてくれ、と言わん目つきで見てきた。

「すみません、今すぐ。」

西崎は持っていたスタンプを手際よく裏面に押し、少女に切符を返した。

「ありがとうございます。では、行ってきます。」

これが、見晴市駅での、学生と駅員との慣習になっていた。だから、この駅ではそう、不思議なことではないはず。だか、西崎にとっては、少し違和感があった。定期券ではなく、切符を使ったのか、と言うことではない。
――このセーラー服の子、昔見た事があるような無いような――
お下げ髪が揺れるセーラー服の後ろ姿を見ながら、西崎はそう考えていた。なぜ、その変哲のない姿を見てそう思うのか。彼には、苦い過去があったのだ。
それは、25 年前、西崎がまだ高校生だった頃、彼のクラスには、学校中のアイドルだった可愛い子がいた。立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花。可愛くて、優しくて、頭が良くて、少し天然で、クラスの人気もので、何でもそろっている、絵に描いたような子が西崎のクラスにいた。
それだけなら、彼には苦い思い出となるはずは無い。むしろ、楽しい思い出となるはず。なのにどうして、苦い思い出なのか。25 年前の今日、“ ある事 ” が起こったからである。
25 年前、彼は高校 3 年生。彼はうわさの、あの子――崎口美香――などのクラスの親しい仲間 5 人でクラブが終わって帰る帰り道で、“ あの事 ” が起こった。
崎口と西崎は幼稚園からの幼馴染で、家も国道を挟んで向かいと言うかなりの近さ。よく遊びにお互いの家に行くほどの仲良し。部活も同じテニス部。
その日、25 年前の今日もいつものように部活の仲間と別れ、2 人で家まで向かっていた。
「達也くん、今日の部活どうだった？」
「少し、腕が落ちたかもな。ダブルフォルトを 3 回連続で出しちゃって、負けちゃったからな・・・」
「そうね、サーブの練習でもしたら。明日、暇だから一緒にしない？」
西崎は特に断る理由も無い。大学は推薦で二人とも、すでに受かっている。
「そうだな、いつするか？」
「明日の放課後で、いい？」
「そうしよう、ラケットとジャージ、忘れるなよ。」
「分かってるわよ。達也君こそ、約束、忘れないでね。」

しかし、この約束が果たされることは、なかった。

しばらくし、西崎の家の前に着いた。崎口の家は目の前の横断歩道を渡ったところにある。

「じゃあ、達也君、又明日ね。」
「うん、じゃあな。ラケット忘れるなよ。」

「分かってるわよ！」
崎口は信号機に付いていたボタンを押した。それを見た西崎は家の門を通り、玄関のドアを閉めた。

これが、崎口と話した最後の瞬間になるとは、西崎は想像もしていなかった。

「ただいま。」
「お帰り、夕食何にする？」
「焼き魚でいいよ。」
「分かったわ、早く風呂に・・・」

「キャャャャャ！」
キィィィィィィ！
ガッシャーン！

外から聞こえてきた悲鳴と騒音で母の言葉がかき消された。

（まさか！）

西崎は急いで玄関を飛び出し、数分前に崎口と別れた横断歩道へ向かった。そこは、いつもの長閑（のどか）な住宅街ではなく、もはや修羅場（しゅらば）と化していた。信号無視のトラックが、崎口の家の隣にあったケーキ屋に突っ込んでいたのだ。

「トラックが突っ込んできたぞ！」
「急いで駐在さん呼んで来い！」
「おい、誰か轢かれたぞ！」
「女の子が轢かれたぞ！速く救急車を！」

彼は野次馬の話に耳を疑った。女の子？まさか！

「美香！美香！」

現場に急いで向かった。そこには、変わり果てた崎口の姿があった。トラックに轢かれ、痛々しい姿となっていた。顔は無傷だったが、体はもう傷だらけ。空色のジャージが赤く血で染まり、息絶え絶えになっていた。

数分後、駆けつけた救急隊員と崎口の両親と共に、崎口は病院へ運ばれた。一緒に行きたい、とお願いしたが、後から来た母に止められ、向かうことはできなかった。

崎口は、病院に運ばれ、高度な手当てが行われたが、二度と、西崎たちとテニスをすることは、もう無かった。

（あれから、もう 25 年か・・・）
西崎は、その後ろ姿と、亡き幼馴染を重ねあいながら、その少女を見送った。
駅が忙しくなるのは、ラッシュの時間だ。朝は出勤する人の波、夜は、退社する人の波で大忙し・・・と言う具合だ。まあ、大抵は定期券なので、見るだけで良いのだが。
そのラッシュが始まろうとしていた頃、いきなり西崎は駅長に呼び出された。
「西崎、人事部から電話だ。」
「人事部！？」
人事部から直接電話があることは、滅多にない。あるとすれば、何か大事があったぐらい、ある意味、クビ、ということだ。西崎は身を震わせながら、電話口に出た。
「はい、見晴市駅西崎です。」
『西崎さん・・・』
あんたクビ、あんたクビ、そう続くのかと、思っていた。しかし、内容は全く別の物だった。
『今日、乗り入れ先で、新しく品岡急行さんって、知ってると思うんだけど、』
「はい。」
『そこから、出向で今日一日だけ、倉野瀬駅駅員の西里さんという人が来るから、宜しく。ああ、確か 3701K で来るらしいから。』
「3701K、了解しました。」
『では、よろしく頼むよ。ガチャッ！』
3701K・・・もうすぐじゃないか！西崎は急いで上りホームに続く階段を駆け上がった。

駆け上がると、接近放送が流れてきた。
「まもなく、１番線に電車が参ります。危ないですから黄色い線の内側までお下がりください。尚、この電車は・・・」

しばらくすると、向こうの方から１灯のヘッドライトが見えてきた。それは段々大きくなり、こちらに近づいてきた。

キキキキキーッ！

軋む音を立てながら、電車は止まった。
「今日は 100 か。」
100 系と言うのは、昨日復活したばかりの車両。創業から使われている車両で、古いボディーの割には結構飛ばす。機器更新も行っているが、それにしても 130km を出すとは、速い。

ふと、前の乗務員室を見ると、ある人が降りてきた。
名札には、「品岡急行電鉄　駅員　西里」と書かれていた。制服こそ、荻鉄(うあ)のものであるが、その名札は、荻鉄のものよりも若干大きいので、西崎としては、少し、違和感があるのだ。
「西崎さんですか？」
「そうですが。」
「あ、初めまして、品岡急行電鉄の西里です。よろしくお願いします。」
「よろしく。では、早速改札業務をお願いしていいかな。」
「はい、分かりました。」
西崎は、西里を改札まで案内し、改札に立たせた。その後の仕事っぷりは、驚くようなものだった。この駅に立つのが初めてとは思えない落ち着きと、手際の良さで、ラッシュの溢れる様な人だかりをさばいていた。

ラッシュの人だかりも落ち着いたころに、西崎は休憩時間となる。西里も、同じく休憩になった。
「いつもこんななんですか？」
「ん、まあそうですけど・・・」
西崎は言葉を濁した。
どうしたんです、という西里の問いに、西崎は静かに、今日で、終わりなんだよ、と答えた。
「なにが、ですか？」咄嗟(とっさ)に、西里は聞き返した。
「この、業務も、今日で終わりなんだよ。」
悲しげな顔をして、西崎は答えた。
「どうしたんです？」
「あまり、言いたくないんだが・・・・・・」
西崎は、そこまで言うと、口をつぐんでしまった。
「何か、あったんですか？」
西崎は、震える声で、その重い口を開いた。
「・・・・・・実はな、今日は、幼馴染の命日なんだ・・・・・・」
そう、震える声で言う西崎の目には、涙が溜まっていた。
「そうなんですか・・・・・・ご愁傷様です・・・・・・」
そう、西里がねぎらおうとした瞬間、

ピピッ、ピピッ、ピピッ・・・・・
時計のタイマーが鳴った。西里の戻る時間だ。
「おっと、時間が・・・・・・西崎さん、ありがとうございました。」
「ん、じゃあ、又いらっしゃい。」
西崎は、涙ぐむ顔で、西里の乗った列車を見送った。しかし、いつまでもメソメソしている訳にはいかない。西崎は、自分を落ち着かせ、改札に立った。そして、また、いつも繰り返されていた、入鋏（にゅうきょう）と集札の業務を、テキパキとこなしていった。

夜が近づくにつれ、帰宅するいつもの客と共に、見慣れぬ、一眼レフを抱えた人も増えてきた。彼らは、改札に立つ西崎や、西崎の同僚を写真に収めていた。彼らは、新聞記者なのか。事実、“ PRESS ”腕章をはめた記者もいた。しかし、大半が西崎と同じく、有人改札終了を惜しむファンだった。彼らは、その、改札業務の一つ一つを写真に収めていった。

そして迎えた夜。

ラッシュが終わった頃なのに、減らぬ人の数。あ～あ、最終日ってモンは、こんな感じなのかな、そう西崎がぼんやり考えていると、今朝の女の子が、又やって来た。
「すみません……」
その娘（こ）は、今朝と同じ、謝恩切符を出してきた。美並高校前駅のスタンプの押された、昭和ノスタルジーの感じる、硬券を。その、切符を、西崎は受け取って、集札をしようかと、使用済券を入れる箱に入れようとした瞬間、
「持ち帰りたいのですが・・・・・・」
持ち帰りたい？こんな女子学生が？疑問を感じながらも、その切符に、「無効　見晴市駅」の印を押した。
「ありがとうございます！」
嬉しそうな顔をして、その娘は夜の闇へと走り去っていった。
その姿を見て、不思議だな、と西崎は思っていた。やっぱり、美香なのかな、人違い・・・・・・だよな、そんなことを考えつつ、仕事に専念した。

何でも、最終日というのは、最後の最後、鉄道では終電の時に、人が多くなり、その雄姿を見納めようとする地元住民やファンの姿が多くなるもんだ。見晴市駅もその例に漏れず、終電間際なのに人だかりがホームに出来ていた。切符も飛ぶように売れた。

そして迎えた、最終電車。

ホームに流れる、蛍の光。まるで、何かを見送るかのように・・・・・・

プァーン・・・・・・

静かに、そして長く、悲しげに鳴る汽笛。

「ありがとー！」
「お疲れ様ー！」
列車に乗ったファンからの激励。
そして、最終列車は、静かに走り始めた。

最終列車が出発し、明日まで来る列車の無くなったホームには、人が居なくなってしまった。
西崎は、電気を落とそう、と消す前にホームを確認するために、ホームに上がった。1 番線ホームには誰も残っていない。それはそうだ。落ちていたゴミをゴミ箱に入れ、反対側の 2 番線ホームへ向かった。
2 番線ホームにも、誰もいなかった。ここにも落ちていたゴミをゴミ箱へいれ、改札へ戻ろうとした。
「達也くんっ！」
懐かしい声がした。ふっと、後ろを振り返った。

そこには、死んだはずの崎口が立っていた。しかも大きくなって。
「……美香？」
「ひさしぶりね。」
「……まさか……こんなことがあるのかよ……」
「何よ、そう人を死人みたいな扱いをして！」
「嘘だろ……」
西里は、死んだはずの幼馴染の顔を見ながら、現実かどうか、判らずにいた。
「もしかして、夢だと思っているでしょ」そう言うと、崎口は西崎の顔を平手で叩いた。
「いてて……ゆ、夢じゃない」
「でしょ」
西崎は頷き、でも、どうして、ここに、と、質問を投げかけた。
「だって、達也君がここで働いているって、聞いたからよ」
「そうじゃなくて、なんで生きて、そうやって経っているのか、って聞いているだけど」
「話すと、長くなるけどね……」
そういうと、崎口は話し始めた。
あの後、病院に運ばれた後、生死の境を彷徨(さまよ)ったこと。そして、気がついたら、病院にい

た事。そのせいで学校を転校する羽目になり、さよならも言えずに学校を替わってしまったこと。またさらにそれがうまく連絡がいかず、西崎たちに教えられずに、死んだと言う噂だけが広まったこと、それで何にも知られずに、ここまできてしまったこと。そういう話を、崎口は西崎に話した。

「そうだったんだ……」
「もう、閉まるみたいだし、じゃあ、また明日ね」
「また来てな。あ、そうそう集札」
西崎は崎口と共に階段を下りた。
「まだシャッター降ろしていないよな」
西崎はそこにいた後輩の駅員に聞いた。
「降ろしてしまいましたが」
「仕方が無い。通用口へ案内してくれ。寝てしまっていたらしい」
崎口の視線が気になったが、西崎は無視した。
「わかりました。集札は？」
「してある」

後輩駅員は崎口を案内していった。それを見た西崎は、宿直室で、しばしの眠りについた。

翌日、西崎が眠っている間に、改札機の交換が終わり、速くも駅が開くのを待っていた。
西崎は、今日は早番ではなかったので、点呼の始まる、6時過ぎに起きた。
「ファーア」
いつもと変わらぬ、一日が始まろうとしていた。

ガチャッ！

いつも通り、ドアを開け、点呼の行われる会議室へ入っていった。
「駅長、お早うございます」
「おう、おはよ～」
呑気なことで有名な篠崎（しのざき）駅長が今日は早い。いつもなら、遅刻して、
「ああ、ごめんごめん」
と、間の抜けた声で謝るのだが、今日は遅刻していなかった。何かある。そう直感的に感じた。

「点呼を始めます。まずは篠崎駅長から発表です」

「ウオッホン！えー今日から新しく改札機が自動となります。不安な者はマニュアルに目を通すよう。又、新しくこの駅に配属された……」
西崎は目を疑った。篠崎の隣に立っていたのは、崎口だったのだ。
「……崎口美香さんです。何かと不慣れな部分もあると思うから、助けてあげるように。美香さん、挨拶をお願いします」
「崎口美香です。よろしくお願いします。あと、同級生の西崎達也をお願いします」
同級生の、と言った瞬間、あたりがざわめき始めた。西崎の同期、大場が西崎の肩をつついた。
「お前の幼馴染！？」
「そうだよ。悪かったな！」
「本当か？」
周りにいた駅員も、西崎の元へ集まってくる。
「そうなのか？」
「そうですよ」
「教えろよ、昔のこと」
「嫌です」
「いいじゃないか」
「嫌です」
「いいだろ」
「嫌です、もう、やめてぇ！」
「やめて下さい！」
崎口が、大きな声でそう言うと、周囲は静まり返った。

そして、変わらぬ、駅員の仕事が、今日も始まった。

数日が経ち、西崎は、あの不思議な出来事を、小説に書く決意をした。

『……最終列車が出発し、明日まで来る列車の無くなったホームには、人が居なくなってしまった。
西崎は、電気を落とそう、と消す前にホームを確認するために、ホームに上がった。1 番線ホームには誰も残っていない。それはそうだ。落ちていたゴミをゴミ箱に入れ、反対側の 2 番線ホームへ向かった。
2 番線ホームにも、誰もいなかった。ここにも落ちていたゴミをゴミ箱へいれ、改札へ戻ろうとした。
「達也くんっ！」
懐かしい声がした。ふっと、後ろを振りえると、改札で切符に無効印を押させた、あの少

女が立っていた。
「お客様、終電ですが……」
西崎が帰るようにせかせた。この時間に、こんな少女が一人で歩いていたら、どんな犯罪に巻き込まれるか分からない。送ってあげようと思ったが、職務上、それはできない。
しかし、その少女は帰ろうとはせず、西崎の顔を見つめながら、
「大きくなったわね、達也君。私はそのままだけど」
と、西崎にとって聞き覚えのある話し方で言った。
西崎は、冗談だとは思いながらも、聞いた。
「まさか……美香？」
「……久しぶりね」
西崎は 25 年も姿が変わらぬ謎を解くため、崎口に聞いた。
「こんなナリになっちまって、25 年も成長していなかったのか？」
「いや、成長したわよ。あ、達也君から見たらそう見えるか」
「そう見える？」
そう見える、という言葉に西崎は驚いた。
「どう言う事だよ？」
「実はね、私だけど、私じゃないの」切実そうな声で、崎口
は言った。
「私の存在は、違法なの」
「違法？」
違法という言葉に耳を疑った。すべての国民の存在は憲法で保証されているはず。中学校の公民で習ったはずだ。なのに、なのにどうして違法なのか。崎口の答えが、それを明らかにしてくれた。
「実はね、私の体は、クローンなの。コピーなのよ」
ああ、そう言う訳か、と、西崎は一人合点をした。生物の授業でヒトクローンは規制されている事を聞いたからである。
「だから、25 年前の姿のままなのか」
「そう。本当は私の名前は崎口美香ではなく、崎口洋子なの」
「もしかして、あの時の、じゃないよな」
あの時の、と言うのは、今から 18 年前、西崎が大学にいた頃、こんなニュースが全国を駆け巡ったからである。

『世界初のヒトクローンの作成者がクローン技術規制法違反で逮捕』
『世界初のヒトクローン、出産　ドナーは脳死状態の女性』
『世界初のヒトクローンのドナー、死亡　死因は心不全』

「あの時のクローン人間は、私なの」
静かな声で、言った。
「えっ」
嘘だと思った。まさかこの娘があの話題になった“アレ”だとは、想像もつかなかった。
「嘘だろ」
「本当よ」
「じゃあ、僕の入っていた部活は？」
「テニス部。私と一緒だったじゃない」
「住んでいた所は？」
「見晴市市内。達也君ちとは道路を挟んで向かい側だった」
質問した事は、崎口が知っていることとしては序盤のこと。西崎はもう一つ、秘密の質問をした。
「じゃあ、初めて二人で買ったCDは」
「覚えているわよ。荒井由美の『ルージュの伝言』だった」
西崎は、驚いた。クラスで二人しか（当の本人たち）しか知らないことも、ズバリ当てたのだ。
「本当に、美香なのか？」
洋子と名乗る、その少女は、小さく頷いた。
「・・・・・・まさか・・・・・・こんなことがあるのかよ・・・・・・」
西崎は、驚きを隠せなかった。
「・・・・・・どうやって、体を乗り換えたんだ？」
「先生が言うには、最新のテクノロジーを使って、昔の私の体から、ある方法を使って記憶とかをそのまま新しい私に移したらしいの」
「ある方法って？」
「さあ、詳しくは分からないの」
「微積分は分かるくせに？」
「でもね、分からない事はあるのよ。私でも」
「まあ、夜も更けてきてるし、そんなナリじゃ補導されるだろう。いくら中身が同い年でも、ほっとけない。今日は泊まっていきな」
「達也君にも子供扱いされたーっ！」
崎口は、子供扱いされるのを、相当いやがっているのか、ふくれた態度をとった。
「・・・でも、ありがとう。その優しさは、昔から変わらないね」』
「・・・という小説を書いてみたんだけど、どう思う？」
西崎が、ワードを起動しているパソコンの画面を、崎口に見せた。
「良いんじゃない・・・って、私をなんで？」
「何でって、良いじゃないか」

「子供扱いしないで！」
崎口は、少し眉をひそめた。
「だってな、その日に、不思議な娘がいたんだよ」
「ふしぎなこ？」崎口は首を傾げた。
「わざわざ謝恩切符を使って、それで帰りには『無効印を下さい』って言うんだよ。こいつは只者じゃないな、って、よく覚えていたんだ。そしてその子が、相当お前に似てたんだ」
「どんな子だった？」崎口は知ってるようなそぶりをした。
「セーラー服に、お下げ髪。ああ、うちのマスコットキャラみたいな服装と髪型だったよ」
そう言って、西崎は壁に貼られていた「おいでよ大真知（おおぐち）」というポスターを指差した。そこには荻鉄のマスコットキャラ、「荻沢みち子」が描かれていた。
「そんな感じだったの」
「うん、簡単に言えばね」
崎口は少し考え込んで、
「あの子、私の妹よ！」
「えっ、どういう事？」
「あの後、転校した後に妹が生まれたの」
「いつの間に？！」
西崎は驚いていた。
「……それで、妹の名前は？」
「由理花（ゆりか）よ。今度高３。」
「その子、鉄道好き？」
「私の影響で、そうなっちゃたみたい。」
「そうなんだ。じゃあ、連れてきてよ」
「多分忙しいわ。でも、多分来るよ」
「その時に」
「分かったわ」
「んじゃ、出向で来てる人が仕事終わったみたいだから、指示出してくる」
崎口は、「がんばってね」と、西崎に視線で労った。
それを見た西崎は、入り口の方へ、足を進めていった。

おしまい。

駅員の一日　作：快速急行

西里「いってきまーす」
品鉄倉野瀬駅の駅員である西里が出勤する時間となった。倉野瀬の町は斜面に作られた街で、鉄道は斜面のふもとにある。
踏み切り「カンカン・・・」
西里「おっと・・・」
自転車のブレーキを押そうとしたそのとき
ブチ！
西里「？」
ガチャ・・・ガチャ・・・
西里「やべ・・・」
自転車はどんどん加速していく。
やがて踏み切りへさしかかった。
近くの倉野瀬商友会のモニュメントが作動し、小人たちが鐘をつこうとした。
自転車「バシ」
モニュメント「ゴ～ン・・・ゴ～ン」
まさかとは思ったけど、死ぬんだ。今日で最後なんだ。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
ガッチャーン！！
西里の自転車が品岡行きの急行電車にぶつかった。
西里は命を取り留めた。
しかし気を失ってしまった。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
西里「・・・あれ？」
西里はいつのまにか倉野瀬駅の改札の銀箱の中に立ってボーっとしていた。
西里「・・・・うーん」
駅長「おーい、西里！」
西里「あ、はい。」
そして西里は駅長室へ連れ込まれた。
駅長「今日は乗り入れ先の荻沢電鉄さんの見晴市駅へ出向だ。」
西里「ハァ？」
西里には理解ができなかったがすぐ制服を脱ぎ、袋に入った荻沢電鉄の制服を持って電車に入った。
電車に揺られること約１時間。見晴市駅に着いた。
西里「へえ～、ここも係員改札なんだ。えーと、あ、あった。」

近くにあった駅員詰め所に入った。
ガチャ！
西里「皆さん初めまして、品岡急行の倉野瀬駅で働いている西里と申します。今回は出向で参りました。よろしくお願いします。」
西崎「あー、西里さんね。初めまして。西崎と申します。」
西里「西崎さんよろしくお願いします。」
まずは改札業務をやらされた。
ﾊｲ。・・・・ﾄﾞｳﾓ。・・・・・
ﾊﾟﾁﾝ、ﾊﾟﾁﾝ。
西里「ふう。疲れた～」
西崎「お疲れ様です。麦茶でもどうぞ。」
西里「あ、どうもです」
アナウンス「まもなく 1 番線に電車がまいります。黄色い線の内側でお待ちください。」
西崎「ﾎﾗ、電車来たよ。いってらっしゃい。」
西里「はーい」

こうして一日が過ぎた。23 時。西里は床についた。これから品急へ西崎が行くことも知らずに・・・
西里「ありがとうございました。」
西崎「いえいえ。また遊びに来てくださいね。」
西崎にそう告げて帰った。
やれやれ・・・西里は宿直室のベッドに寝転んだ。そして寝てしまった。
西里「グウウウウ・・・・・・」
キキィー！
ドグァガッチャーン！バリバリドシーン
西里「！？！？！？！？」
西里はどうしたのかさっぱりわからない。
外へでて見てみると、信号無視のトラックが倉野瀬商友会のモニュメントに衝突し、その弾みでモニュメントが倒壊した。
西里「あああっ」
西里は愕然とした。
なぜならこのモニュメントはこの駅の開業より前にあったものだから。
西里「あああっ電車止まれーーー！」
モニュメントの柱が線路をふさぎ、さらにその踏み切りに品岡行きの普通電車が突っ込んでくる。
西里「とマレー！とマレー！」

ドガーングァガッシャーーン！！！
西里「あああっ」
またしても愕然。
その普通電車が最古のデハ 12 型だもの。
西里「大変だ。すぐに指令に連絡しなくちゃ。」
プルルルル
指令「輸送指令です。倉野瀬駅ですね。どうしましたか？どうぞ」
西里「こちら倉野瀬駅です。えーと、倉野瀬商友会前踏み切りにて多重事故です。最初にダンプがモニュメントに衝突し倒壊。その柱が線路をふさぎ、さらに 02 の普通品岡行きが突っ込み原型をとどめていない状況です。どうぞ」
指令「輸送指令です。そちらの状況把握しました。ただちに運転見合わせの措置をとってください。」
西里「了解しました。」
すぐにアナウンスでおしらせする。
西里「ただいま、この駅志村坂寄りの踏み切りにて多重衝突事故がはっせいしました。このため運転を見合わせています。ご迷惑をおかけしますがご了承くださいー。」
客ら「うおらー！！どうしてくれるんだ～！帰れないじゃないか！」
西里「お止めください！お止め・・・ウェ」
西里は押されて倒れこんだ。そこへ客らの足が襲う。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
西里は意識を失った。そして 2～3 日は昏睡状態がつづき危篤だった。
あくる日
西里「う、うーん」
西崎「西里さん！！」
西里「う・・・n、あんただれ？・・・」
西崎「忘れたんですか？荻鉄見晴市の西崎です！」
西里「ああ・・・にし・・ざきくん・・か・・・」
西里「ガクッ」
西崎「西里さあん！！」（以下原稿無し）

リバイバル掲載版

「はい、倉野瀬駅です。」
電話にでた西里。
「もしもし。品岡急行電鉄の社長の川西だよ。」
なんと電話は社長直々のものだった。
「しゃ、社長～！ど、どうしたのですか！？」

まさか、「あんたクビ、あんたクビ」とか言うのかと思ったが
「倉野瀬駅の係員改札は 4 月 3 日を持って終了するよ・・・」
「え」
西里はドキッとした。まさか、この改札がなくなるなんて…
「ま、まさか嘘ですよね・・・」
「実は本当なんだ・・・すまない・・・」
「えっえええええ」
4 月 3 日の係員改札廃止もなくなり、陽気な西里は、
きょうも改札に立っていた。
倉野瀬駅は、品急で一番乗降客が少ないため、本人は少し退屈気味だった。
「あ～あ、今日も暇だな～」
グラグラグラ！
「うおっ」
突然、大きなゆれが倉野瀬駅を襲いました。
グラグラズドーン！
「わあああああ」
慌てて改札の集札箱の下の隙間に体を入れた。
グラグラ・・・・ピタッ
地震は収まった。
恐る恐る、西里は顔を上げた。
数分前の景色はきれいだった。しかし今の風景はもはや修羅場と化していた。
駅系普通新荻沢行きはもはや原型をとどめていない。
「・・・・こんなことがあるのかよ・・・・」
そういいつつも指令にが半分崩れ、「倉野瀬駅」の看板がめちゃくちゃになっている。
ホームに止まっていた 103 状況を報告した。
「もしもし、倉野瀬駅です。大変なことになっています！！！」
「こちら指令もたいへ・・・・」
「もしもし！もしもし！」
指令への電話線が、架線柱の倒壊により切断された。
「どうしよう。」
迷った西里は、いったん駅前にでようと駅からでた瞬間
ガガガガガドシーン！
倉野瀬駅がついに倒壊した。（以下原稿無し）

恵理、お早う～夢電＆市立夢ノ浜高校の愉快な事～　作：快速急行

第 1 話・花本一関駅のお手伝い

「お早うございます！」
「お早う～。」
朝の花本一関駅南口にこの声が木霊する。
朝、恵理はラッシュに備えほんの 1 時間だけ臨時出札口で切符の販売を行う。

「夢ノ浜まで、620 円です。」
「はい、ありがとうございます。」
「三島山へは、夢ノ浜での降車が便利です。」
「はい、620 円丁度お預かりします。」

朝、こんな風に出札が行われる。

出札が落ち着くと、今度は改札である。

「はい、どうぞ」
「どうも」
「あーすみません。ありがとうございました。」

やっぱりこんな風。

最後は花本一関駅 6 番線でたっていること。これは普通に監視していればおｋ。

仕事が終わり、夢ノ浜まで乗るときが来た。

恵理の常連電車は、朝の三島観音止まり。車両は最古の 1000 系である。又、1000 系は改造前は標準軌なので、導入時に狭軌に変更されている。

ちなみに高校名は夢ノ浜高校なのに、場所はなぜか三島観音なのです。

第 2 話・通学中の悲劇

今日も恵理は通学。
今日は 1000 系 1001F。いつものとおり乗り込み、出発した。

途中、一関本町での出来事。

「キャーーーーーー！」
「キキィーーーーー！」

悲鳴とともに電車は急停車した。
原因は人身事故。しょうがなく一本前の電車に乗った。
車両は 3000 系 3001F。急行の間合い運用である。
そのまま三島観音へいき、バスで高校へ向かった。

「お早う～」
「あーお早うー」

クラスメイトの元気な挨拶が２－Ｂに響く。（以下原稿無し）

第 3 話・荻鉄河和線

高校が終わったので、久しぶりに河和のほうへショッピングへいこうとなった。
もちろん夢電→荻鉄！
三島観音駅に最初に着いたのはなんと、

「ユメデンフロデン号」である。

幸い着替えを持ってきていたので、風呂に入った。
少しして、終点花本一関に到着した。
乗り換えして、西東風ヶ丘行に乗り込んだ。
途中、東風ヶ丘中央で、みち子＆鉄哉にばったり会ったのである。（以下原稿無し）

「あれ・・・？」
恵理は、見慣れたような車両を見てきょとんとした。
夢電では、こういう車両は見かけないのに、懐かしく感じるのだ。
103 系と別れて花本一関にもどった。
途中、1717K 普通電車で帰る途中に、運転席からこんな声がきこえた。
「指令！！指令！！1717K、緊急停止しますぅ！」
「どうした？1717K！」
「なにかが・・・うわあああああ！！！！」

プツッ。
運転士の谷山(※)が指令とやりとりしていた。
が・・・
「どしーーーん」
巨大な衝撃音とともに恵理は飛ばされた。
「う、うーーん」
恵理が目を覚ましたときは、3 号車の乗務員室扉にもたれかかっていた。飛ばされたあと、打ち付けたのだろう。
「ガーー・・・」
スピーカーが一生懸命声を出そうとしている。
がんばれ、1001F!!

編集者注：※の人物については「品急の一日」を参考に。

第 4 話・ある少女との出会い

1001F は、花本一関駅の 5 番線に飛ばされた。
そして普通にドアが開いた。途端に太陽が出てきた。
どうやら朝に飛ばされたらしい。
恵理は夢電の改札口へ向かい、恒例のお手伝いをすることになった。
午前 7 時すぎ、普通に改札を行っていたら、電動車椅子に乗った小さな少女がやってきた。
「お願いします・・・」
「は、はい。」
恵理はその少女に丁寧に切符を切ってあげた。
「ありがとうございます！」
元気にそう言い放つと、エレベーターの方へ向かって行った。
恵理は、その少女にやさしく手を振ってあげていたが、恵理の胸になにか詰まるようなものがあった・・・

第 5 話・再会

恵理の胸になにか詰まるようなものがあった・・・
その後、駅長(お父さん)にあの子の事を話した。
すると、とんでもない返事が返ってきた。
「あれは、親戚の宮崎(みやざき)さんの娘さん。」
「えっ」

恵理は少しだけ驚いた。
その後、家に帰った恵理は、ふと夢ノ浜駅へお昼を食べにいこうとすると、ふと、隣の隣にある宮崎宅を見た。だが誰もでてこなかった。
目線を戻して夢の浜駅へ向かった。
お昼を食べ、家へ戻る途中、“あの子”と擦違った。
あの子は少しだけお辞儀をしたので、恵理も少しお辞儀をした。
家に帰ると一通の手紙がポストに入っていた。
家の中に入り、手紙を見ると、
「　夢ノ浜恵理さんへ
　あの時はありがとうございました。
　高校2年生なのに、地元・夢電のお仕事ができる　　なんて・・・
　これからもがんばってくださいね。
宮崎　春香（はるか）　」
と記してあった。
そのときであった。
「キャアーーーーー！！！」
ドグアがっしゃーン！
大きな音がした。
恵理は玄関を飛び出し、
音のした2丁目交差点のほうへ向かった。
そこでは、信号無視のトラックが宮崎宅の隣にあるユメデンストアに突っ込んでいた。
ユメデンストアの中に、人が一人倒れている。
・・・電動車椅子だろうか。機械がその横に倒れている。
そのとき、恵理ははっとした。
「まさか・・・・」
と思い、ユメデンストアに駆け込んだ。
倒れている人は、やはり宮崎春香だった。
「春香さん！！！春香さん！！！」
大声で春香の名を叫んだが、返事は無かった。
春香の冷たく、冷え切った腕をそっと掴んで、ちょっぴり泣いた。
その腕を恵理はそっと置き、その場を後にした。

第6話・春香が生き返った！？

春香が死んでから数日が経ったある日、いつものように花本一関駅で改札をしていたときに、“あの子”がやってきた。

「夢ノ浜・・・恵理さんですよね？」
「ええ。私が夢ノ浜恵理ですが・・・」
声も顔もそっくり宮崎春香だったが、自分でたって歩いていた。いわゆる“健常者”である。
「私、宮崎春香です。」
「えっ」
驚いた。宮崎春香が死んだはずなのに・・・
「私、実を言うとクローンで生き返った。コピーなのよ」
「待って。事務室で話そう。」
恵理がストップをかける。
「出馬さん、改札お願い。」
「はい。」
出馬駅員に改札を任せると、事務室へ向かった。
「あの話の続きをお願いします・・・」
「あの後・・・」

第7話・春香、さよなら・・・

「あの後、私は高度な手当てを受けられたそうです。そこで、お医者さんが『ヒトクローン」っていうことを思いついたのです。そこで、ドナーを探していたのですが、偶然にもみつかりまして、クローンになったのですが・・・」
「本当は二人とも生きたままになるのですが、ドナーのほうの人が心不全で亡くなってしまって・・・」
「でも私は生き残ったのでヨシ、とお医者さんは言うのです。」
「そうして退院したんです。」
「なるほど・・・」
恵理は感心したように言った。
「そうだ。私、ちょっとだけど電車、運転できるの。」
「えっ！？ぜひ乗せてください！あなたと会えるのは最後なので。」
「えっ」
恵理はその後の言葉に驚いた。
「最後・・・とは？」
「私、品岡のほうへ引っ越すんです。そこで・・・」
「わかった。花本一関まで運転しよう。夢ノ浜から。」
「えっ、いいのですか？」
「私、最年少で運転の免許を持っていて、現役の運転士なのよ。」

「ぜひお願いします。」
「わかった。いつ？」
「5 月 26 日です。」
「一番好きな車両は？」
「やはり、3000 系ですかね。」
「わかった。つたえておくわ。」
そして、数日後の 5 月 26 日、宮崎家は、夢ノ浜駅 1 番線へ向かった。
「こ、これは・・・」
そこには、3000 系第 1 編成があり、シール幕に「さようなら　宮崎さん」という文が書かれていた。
そして、1 号車の扉から、恵理がでてきた。
「さあ、乗って。」
「あ、ありがとう・・・」
みんなが乗ったのを窓から確認すると、恵理は扉を閉めた。
「そうだ、春香ちゃん、運転席に来ていいよ。」
「ありがとうございます！！」
つい、敬語になってしまった春香を誘って、運転席に連れ込み、隣の席に座らせた。
「おっけー？」
「うん」
「出発進行！」
恵理は正面の信号を指差し、マスコンを上げた。
3000 系はゆっくり走り出した。
そして約 20 分後、花本一関にゆっくりと進入した。
「ありがとう。」
「いえいえ。これからもがんばってね。」
そういい残し、宮崎家は、花本一関を去った。

おしまい。

みち子、今日も元気？～荻沢電鉄の不思議な出来事～　作：亀山茂則

トゥルルルルル・・・

『間もなく、4番線から、普通東風ヶ丘中央行きが発車します。ドアが閉まります、ご注意下さい。』

「出発進行！」

みち子たちは、この列車の終点、東風ヶ丘中央に乗り入れている路線のひとつ、河和(こうわ)線にしか運行されていない車輛、103系+200系の列車を見るため、この列車に乗ったのだ。ただし、この列車も、N200系600番台+290系という珍編成なのだが。

「鉄哉、楽しみだね」
「うん！」

『次は、宮路島(みやじじま)、宮路島です。宮路島航路はお乗換えです。The next station is Miyazi-Shima. Passengers traveling to Myzazisima please change here for the Myzazisima Ferry Services.』
列車はぐんぐんスピードを上げたかと思うと、すぐに止まった。宮路島駅に着いたからだ。
『間もなく、宮路島です。降り口、右側です。Now arriving…』

ドアが開いた。微かに磯の匂いがした。

「まだ、お姉ちゃん？」
「まだよ。まだ一駅しか過ぎてないじゃないの！」

ドアが閉まり、また走り出した。
春の海岸線を、列車は颯爽(さっそう)と走っていた。

放送が、次の海浜公園駅の案内を始めたころ、突然、車内を急激な揺れが襲った。

「荻沢指令所、荻沢指令所！こちら、東風ヶ丘中央行き 4402K、地震が発生しました！直ちに緊急停止いたします！」

『何戯言（たわごと）言っているんだ？何も・・・』
この付近を管轄している、荻沢指令所では、4402K に何が起こっているのか、把握できていなかった。
「・・・こちらでは確認できないが。」
こう返すしか、言葉は無かった。
『指令所！ATO、作動停止しました！』
「手動に切り替えて、運転を続行せよ。」
しかし、司令所のモニタには、何も変化は無い。通常であれば、手動運転を行っている車両がある場合、指令所のモニタにそのことが表示されるはず。何かがおかしい。指令所では、危険を感じ取っていた。
『切り替えました。』
「反応してないぞ・・・」
4402K の運転手、桜山（さくらやま）は何が起こったのか訳がわからなくなっていた。
『・・・機器のエラーかもしれないが、確認してくれ。』
桜山はコンソール・パネルにある ATO のスイッチを確認した。確かに、手動側になっている。
「手動になっています！」
桜山から連絡を受けた指令所では、急いで機器の確認を始めるべく、指示を出そうとした。
だが、次の瞬間、
『何かが近づいてきます！あ、ぶつかる！ギャァー！』
悲鳴とともに、回線が切れた。
「4402K！4402K！」
マイクに向かって指令長の大田が叫ぶ。
「指令長！4402K が消えました！」
モニタを見ていて、先ほどまで指示を出していた木下が叫んだ。
「馬鹿を言え、ちゃんと調べろ」
「ですが・・・」
「指令長、ATO システムからエラーです。」
「えらー？」
間の抜けた声で、大田が返した。何がなんだかわからなかったのである。
「はい。自己診断機能でも原因がわからないんです。」
「仕方が無い、ATO を止めて、すべて手動にしろ。」
「了解しました」

少しジメジメとした、五月（さつき）の昼下がりのことだった。

その頃、桜山の運転する 4402K は、謎の光に包み込まれた。
「うわぁぁぁぁ！」
そして、海の広がる、美しい大具知の海が消え、辺り一面が真っ白な霧に包まれた。
「何なんだ・・・」
しかし、彼は乗客を守ることが彼に課せられた使命なのだ。彼は咄嗟に、制動をかけた。
速度がじょじょに落ちていく。そして、停車しかけた頃、霧が晴れた。景色が戻ってきた。
先ほどまで走っていた、大具知の海が見えてきた。桜山はすぐに前方に明示された信号を見た。青だ。桜山はマスコンを入れ、速度を上げ始めた。それを報告すべく、桜山は列車無線に手をかけた。
「指令所、こちら 4402K、応答願います」
指令所からの応答の代わりに、ガーと言う音だけが流れてきた。列車運行支援装置-TIMS-画面を確認すると、“ 通信遮断 ” とただ一行、表示されていた。桜山は、仕方がなく、無線の受話器を置き、ATO 起動のボタンを押した。
数秒後、返ってきた表示は
“ ATO･ATC-Do-Next エラー　ATC-DT 互換モード作動 ”
だった。

そのころ、みち子と鉄哉は、先ほど突如現れ、消えた霧について語り合っていた。
「あの霧、なんだったんだろう？」
「そうね、何だったのだろうね。でも、大丈夫よ。」
「・・・でも・・・」不安げに鉄哉が言った。
「どうしたの？」
「なんか、外の風景が変な感じがする」
「変？どこが？」みち子は分からなかった。
「ほら、そこ」鉄哉が沿線に立てられていた看板を指差した。そこには『新車両、登場。'88.4.1 ダイヤ改正より　荻沢電鉄』とかかれた文と、200 系が描かれていたのである。
みち子はそれを見て、驚いた。そして、こちらに向かってくる対向車にも、みち子は驚いた。今ではレアもの車両となっている、100 系が、8 両という今では見られない長大編成でやってきた。
２人は驚きつつも、この不思議な現象に、首を傾げていた。

みち子達を乗せた列車がたどり着いた時代、それは 200 系が導入されて間も無い、昭和 63 年、1988 年の初夏であった。1988 と言えば、1 月にゴルバチョフの指導の元、ペレストロイカが開始され、第 15 回冬期オリンピックがカナダのカルダリーで開かれた年である。
荻沢電鉄では、4 月 1 日に期待の新車両、200 系が導入された、転機の年であったのである。
そんな年にタイム・スリップしてしまったみち子たちを乗せた列車は、注目の的。沿線で

は、カメラが一斉に向けられ、バシャバシャ撮られていた。幸か不幸か、みち子たちを乗せた N200+290 系は、昨日（といってもタイムスリップ前の昨日だから相当未来の事だが）全検から出場したばかりで、ボデーはピッカピカに塗装されており、さながら新車のようだった。沿線でカメラを向けるファンは、新車と勘違い（前面が違うので、マイナーチェンジと勘違いしていた）し、速攻でカメラを持って沿線に向かったという訳である。
指令所では、沿線のファンたちの騒ぎとは、別の意味で騒いでいた。何せ、突然、8 両の列車が本線に現れ、堂々と走行している。しかも無礼にも指令所に連絡もいれない。列車番号も付いていない。指令長の桜山は、怒りの電話を荻沢にある車庫にぶつけた。
『もしもし、こちら荻沢車庫』
「おい、8 連を勝手に出したか？」
『出してませんけど・・・』
「ふざけるな！」電話が壊れんばかりの大声を出した。「じゃあなんで CTC には出ているんだ？ハァ？言ってみろ！」
『わかりませんよ・・・本線に出ている車両以外は車庫にちゃんとありますよ』
「うっ・・・」桜山は、図星をつかれた。確かに、この車庫係の言うことは正しい。間違っていない。どうするべきか。
「わかった、ありがとう」怒鳴った声とはうって変わって優しい声に急になってしまった。そして、桜山は受話器を置いた。
「何でだろうな・・・」
桜山は、彼の息子（未来の）が運転している列車のマークを睨み、案を捻っていた。
「おい、未確認列車の付近の駅は？」
「海浜公園駅です。後 1 分で到着します」
「海浜公園駅に連絡。入線してきた下りを確認するように伝達しろ」
「了解しました」

ピンポンパンポ～ン
『間もなく、２番線に電車が参ります、危ないですから黄色い線の内側にお下がりください』
「何だよ、見とけって」
「なんか未確認の列車が来るらしい」
「めんどくさいな。また機械のエラーじゃないのか」
「でも・・・」そう言う駅員、柳沢の手にはカメラが握られていた。
「おい、来たぞ」
赤・緑・黄色三色の車体が近づいてくる。200 系だ。彼らはそう思った。しかし何かが違う。近づいてくる VVVF インバータ特有の磁励音（じれいおん）。速い入線速度。やはり何か違う。柳沢はカメラで写真を撮りまくっていた。

やがて、列車が停車位置ちょうどに停車し、ドアが開いた。
ドアが開くと同時に、ホームにい客が何名か乗り込んだ。殆どが、一般の、海岸からの客だったが、何名かは、興味本位で、カメラを持ち込んだ鉄道マニアや、噂を嗅ぎつけた新聞社のカメラマンも乗り込んできた。
柳沢は、持っていた無線機で司令室に連絡を取った。
「一応、200（系）ぽいんですけど、何か違うような気もするんですが」
『200？そんな訳ないだろう！』無線から、桜山の怒鳴り声が聞こえてきた
「はっはい、一応、確認してみます。大具知まで乗車してきます」
『手短にな』
無線機を切り、柳沢と、もう一人の駅員、樋口は N200 系に乗り込んだ。

「綺麗だな」
「ええ、荻鉄が威信をかけた最新車両ですから」
そう呟く、カメラを持ったファンの声が聞こえる。

４号車の乗務員室にいる、車掌の樋口は発車ベルの遠隔装置ボタンを押した。しかし反応はない。ホームに下りるとボタンがあった。これかな。不安に思いながらボタンを押すと、ベルが鳴り響いた。ふう。ほっと胸をなでおろした。数秒鳴らしたのち、ベルを止め、ホイッスルを吹いた。
ピューッ、ピッ！
笛の音がホームに響き渡る。樋口はホームを確認して、ドアを閉めた。
ドアを閉めた後、乗務員室の壁にある、電鈴（でんれい）を二回、鳴らした。これは発車を意味するもので、路面電車であった東浜（あがりはま）支線の買収時にそう決まったそうだ。樋口は、どうして路面電車のことを郊外電車でしないといけないのか分からなかったのだが、一応規則なので鳴らした。樋口も、この、チンチン言う音が好きだった。

そして、VVVF インバータ制御車独特の音を立てて、列車は出発した。

車内では、なぜか女声の車内放送に驚いていた。
『次は、大具知、大具知です。夕日台環状線、西美並町線はお乗換えです。大具知の次は、見晴市（みはるし）に停車いたします。The Next Station is Ooguchi…』
「車掌は女だったけど、こんなに明瞭だったか」
「しかも英語まで付いてるし」
「ていうか夕日台線は環状線だったか？」
「違うわよ」
「この放送間違ってるじゃん」

車内が、ざわざわし始めた。樋口は、やばい、と感じた。何故か分からないが、自動放送が間違えているようだ。慌てて修正する。
「申し訳ありませんでした。ただいまの放送はミスでした。」

樋口の、一応の訂正で騒ぎは収まった。
しかし、過去の世界ではこんなに騒ぎになるなんて、と樋口は予想していなかったことに驚いていた。

みち子は、車内で、ある人を見つけていた。彼女たちの、母親となる、品岡美紀子である。
「ねえねえ」
「なんだよ、ねえちゃん」
「あの人、お母さんに似ていない？」
鉄哉は、嫌々そうな雰囲気で、その人を見たが、見た瞬間、彼の顔は一瞬で変わった。
「お母さんにそっくり！」
「でしょでしょ」
一方の美紀子は、自分が自分の娘、息子に見られている事など気づかず、流れ行く車窓に、“ あの人 ”を思い浮かべながら、遠くを見つめていた。

列車は昼下がりの海岸線を駆け抜けていった。

やがて列車は、学校の帰りであろうか、制服姿の多い大具知駅に滑り込んだ。

20 年後　列車が時間移動してから 30 分後

『・・・この帆立貝柱のジュワっと広がる旨みがまた・・・』
ピロリンと言う電子音と共に、“ ＮＣＴＶニュース速報 ”と言う字幕が上の方に点滅した後、いきなり、画面がニュース画面に変わった。
『番組の途中ですが、臨時ニュースをお伝えします・・・』
女性キャスターが画面中央に映っている。
『・・・先ほど行われた、荻沢電鉄の発表によりますと、荻沢駅発東風ヶ丘中央行き混合列車が、忽然と姿を消しました。行方が分からなくなっているのは、桜山直久運転士、樋口陽子車掌の乗務する、混合普通列車で、荻沢を 14 時 10 分過ぎに発車し、東風ヶ丘中央駅に 14 時 40 分ごろに到着する・・・』

（姿を消す・・・おかしいわね・・・）

美紀子は、テレビの画面を見ながら、ふと思い出した。
（そう言えば、あの子達、電車に乗ると言ってたわよねぇ・・・）
美紀子は立ち、脇のテーブルに置かれていた電話をとり、ダイヤルを廻した。
（あの子の携帯の番号、確か 090-XXXX-XXXX だったわ）
そして、みち子の携帯に電話を掛けた。
トゥルルルル・・・トゥルルルル・・・
『こちらは、ＯＧＭ（荻沢移動体通信）です。お客様のおかけになった電話は、電波の届かない場所にあるか・・・』
美紀子は、急いで荻沢駅のダイヤルを廻した。
『もしもし、荻沢駅です』
「もしもし、記名 SIOKA の追跡をお願いしたいのですが」
『了解しました。お客様コードをどうぞ』
「OGR01-XXX-XXX-XX です」
『少々お待ち下さい』
美紀子は、あせっていた。子供たちの安否が心配だった。
『分かりました。最終確認は、4402K の車内改札・・・あの列車！』
「えっ！？」
『申し訳ございません、お手数ですが駅までお越しいただけますか』
「分かりました・・・」
電話を切ると、美紀子は大声で泣いた。

しかし、1988 年のふたりは、そんなことなど知らず、88 年の母親を観察していた。
「ねえねえ、姉ちゃん」
「何、鉄哉」
「たぶんあの人、お母さんだよ」
「どうしてなのよ」「だって・・」
鉄哉は、88 年の美紀子を指差して言った。
「胸の刺繍を見てよ」
美紀子のセーラー服の胸には、刺繍で『品岡美紀子』と書かれていた。
「本当だぁ！じゃあ、私たちが来たのは・・・過去！？」
「そうみたいだね」
「じゃあ、私たちどうするの？」
みち子は心配そうに言った。
「さあ」
鉄哉はあっさりと言った。
しかし、そのあっさりとした発言をみち子が切り裂いた。

「鉄哉、透けてるわよ」
「え？」
「だから、透けてる！」
半ば、金切り声に近い声をあげた。
「あっ！」
鉄哉は、自分の腕を見て気づいた。自分の腕を通して床が見えていた。
「どうしよう・・・」
「どうしようって・・・でも・・・大変だわ・・・」
彼女たちの存在を、時空は消し去ろうとしていた・・・

その頃、2009 年の美紀子は、荻沢駅員から、事情説明を受けていた。
「・・・と言った状況下で、発生した訳ですね。」
「まあ、そういう訳です。」
物理学科の出身である、美紀子にとって、何もかもが理解し難い状況だった。それまであった列車が消失する？あり得ない！説明が付けれなかった。ただ・・・彼女の脳裏を、ある遠い昔の思い出が過った。
遠い昔・・・見晴市の高台で、高校生ぐらいに、娘たちに、すごく似た子たちに会ったような・・・そして、子供が生まれたらこう付けてほしい・・・みち子、鉄哉、そして、有祈子・・・もしかして！彼女ははっと思い出した。
「どうかなされましたか？」
駅員が驚いた顔をした。
「事情説明はいいので、見晴市駅までの切符を下さい。」
「わかりました・・・220 円です。」
「はい、どうぞ。」美紀子は 220 円を渡した。
「はい、見晴市までの切符です。ご利用、ありがとうございます。」
そして、彼女はかけるようにホームへ向かった。
そして、彼女は、やってきた快速列車に乗った。奇しくも、連結されていた車両のうち、一つが N200 系だった。

そして、すべるように列車は荻沢の町を後にした。

その頃、1988 年のみち子たちにも、異変が起こっていた。透けていたからだが元に戻ったのである。
「姉ちゃん！戻ってる！」
「本当だ！」
彼女たちは、ただ単純に喜んでいた。

そして、N200系は、見晴市駅に滑り込んだ。

「ねえねえ、鉄哉」
「何、姉ちゃん？」
「お母さん、尾けてみない？」
「それって犯罪・・・」
「シーッ」
みち子は、鉄哉の口を押さえた。
「フングフング・・・」
「いい、危機を乗り越えたとしても、お母さんとお父さんは結ばれないと、私たち、消えてしまうの」
鉄哉は頷いた。
「だから、お母さんとお父さんのキューピットになるのよ。いい」
鉄哉の答えは一つしか無かった。
そして、みち子と鉄哉は、開いたドアから、急ぐように降りた美紀子の後を、つけるように降りた。
みち子は、階段を下り、直に改札へ向かった。
「ねえちゃん」
「何？」
「切符、持ってる？」
「あ・・・うん。」
鉄哉は、みち子が切符を持っていないものだと、勘違いをしていた。
「はい、鉄哉」
手渡されたのは、手書き補充券の、東風ヶ丘中央までの切符だった。
「こ・・・これは？」
「車内改札では、間違えちゃった」
「もう・・・ねえちゃんったら・・・」
鉄哉は、ほっとしていた。

切符を改札員に渡し、改札を出て、見失いかけた美紀子の姿を見つけると、すぐさま尾行を始めた。

美紀子は、見晴市市内最古の神社、御神城天満宮（おみきてんまんぐう）へと続く坂を、上っていった。

御神城天満宮は、地元では、「恋がかなう」と言う事で有名だったが、当時、見晴市市なん

て、田舎のちょっと大きな坂の多い、マイナーな一都市でしか無かった。何故、こんなに有名になったか。これには荻鉄が関わっていた。
当時、見晴市市は過疎地帯となりつつあり、当時の市長、故・穂並紗子(ほなみさやこ)市長からの打診で、どうにか町おこしに利用出来ないか、と、荻鉄が考えた結果、「見晴市を舞台としたアニメを作ろう」と言う事となり、生まれたのが荻鉄のマスコットキャラ、荻沢みち子であった。
彼女は、穂並市長の中学時代をモデルとし、見晴市出身のイラストレーターで息子のほなみまさやによって、描かれたものであった。
しかし、彼女が生まれたのは 2007 年。設定でも 1994 年。1988 年の人間に、そんな話しても通じない。「ナニソレ」一言で流されてしまう。
しかし、そんなマイナーな場所であるが故、他の知り合いにバレにくい。美紀子はそれを狙ったのであった。

「待った？」
境内に立っていた、金ボタンの学生に声をかけた。
「いや。大丈夫だよ」
振り向いた金ボタンの学生は、和夫だった。

「あれってお父さんだよね」
「昔だとかっこいいね」
尾けていたふたりは、ひそひそ声で話していた。

和夫と美紀子は、本殿の前に立ち、お賽銭をなげてお参りをしていた。

「作戦実行よ」
みち子がそう言うと、鉄哉は深く頷いた。

二人は、88 年の両親がしたように、お参りをし、長い坂を市街地へと戻っていく、両親を尾けていった。
数分後、みち子たちは、夕日に照らされた見晴市市内を歩いていた。
「・・・結局、タイミングが無かった、訳か」
鉄哉がため息をついた。
「たぶん、私たちが関与する必要なかったのよ・・・」
みち子は俯いていた。
「・・・過去に関与したら、私たちの身にすら危害が及ぶかもしれない。でも、なにもしなくても戻った、と言うのは何もしなくてもよかった、というしるしなのかも」
「かもね」

彼らは、暗い気持ちだった。どうしても未来に戻れない、もどかしさにイライラしていた。そんなどんよりとしたみち子たちの前を行く、和夫たちは、ルンルン気分。みち子たちの気持ちなんで、知る由(よし)も無かった。

やがて、駅近くの交差点まで来て、４人は信号に引っかかった。

「長いな」
和夫が信号を睨んでいた。
「広い道だから、長いのよ」
美紀子が宥めていた。

そんな彼女たちの静寂を破るように、不幸が大音響とともに滑り込んできた。

「キャー！」
「うわぁ！」

４人は避けた。だが、みち子が逃げ遅れた。
「キャー！」

私は死ぬんだ。この昭和の地で、知り合いに誰として看取られずに。もうだめだ。お母さん、お父さん、助けて。彼女の脳裏では、思い出が走馬灯(そうまとう)のように駆け抜けていった。

「危ない！」
聞き覚えのある声がした。と、思うと、体がふわりと浮き、何かに抱きかかえながら転がる感じがした。

そして、重い何かがぶつかるような音が聞こえてきた。

「大丈夫かい」
みち子はそっと、目を開けた。そこには、有きし日の父が立っていた。
「お父・・・さん・・・？」
和夫は首を傾げた。
「お父さんだなんて・・・とりあえず、大丈夫かい」
「は、はい」
「無事で何よりだ」
和夫は、みち子の無事を確認すると、学生ズボンについたごみを払っていた。

周りから、どっと拍手が起こった。２人の無事と、和夫の勇気を讃えての拍手だった。

それから数分後、4 人は近くの喫茶店に入っていた。
「ご注文は？」
「珈琲(コーヒー)2 つ、オレンジジュース２つ。」
数分すると、珈琲とジュースが運ばれてきた。
「ごゆっくりどうぞ」
小柄なウェイトレスがテーブルの上にトレイを置いた。

「どうぞ」
「いいんですか」
「お構いなく」
みち子がテーブルの上に置かれたジュースを飲んだ。
「申し訳ないです。助けていただいた上に、おもてなしまでしてくださるとは・・・」
「いえいえ」
和夫は照れていた。

一方、N200 系とその他の未来から来た乗客・運転士・車掌は東風ヶ丘中央駅に居た。

「なんだよ待てって」
「さあ」
「分からないわ」
未来から来てしまった乗客は、怒っていた。
すると、ドアが閉じられ、列車が動き出した。
「おい！」
「どうする気だ！」
怒りが最高潮に達した。すると、運転室から、樋口車掌が出てきた。
「どういうことだ！」
乗客の一人が樋口を睨んで言う。
「今からお話ししましょう。乗客の皆さん、こちらをご注目ください」
そう言い、乗客を集めると、ポケットからカメラを取り出し、フラッシュを焚いた。すると、乗客が気絶した。

その数秒後、電車が止まった。引き上げ線の終端についたのだ。
桜山が、反対の運転台から樋口の元にやって来た。
「お、お前・・・どういうことだ・・・」

桜山は、異様な光景に驚いていた。
「耳を貸してください」
樋口はそう言い、桜山を呼び寄せると、彼に耳打ちした。
「ああ、そういうことか」
「そう」
そして、運転台に座ると、列車を先ほどとは逆、荻沢方向に走らせた。

みち子と鉄哉は、２人に事の一部を伝えた。
「・・・というわけ、か」
「ＳＦみたい」
2 人は、思い思いの感想を述べていた。
「うそでは、無いです・・・よ・・・」
みち子は、少し自信なさげだった。
「うん、信じる」
「俺も」
信じてくれないと思っていた話を信じてくれて、みち子の顔はほころんだ。
「良かった、信じてくれて。あ・・・」
みち子の時計のタイマーが鳴った。
「・・・時間が無いので、最後に、お願いがあるのですが」
「何？」
美紀子が問いかける。
「あ、あのですね・・・」
心臓の鼓動が高まる。
「唐突かもしれませんが、子供の名前とか、決めてますか？」
「いや」「いえ」
2 人声を合わせて言う。
「失礼かもしれませんが・・・」
鼓動が最高潮になる。
「・・・2 人決めさせてもらってもよろしいでしょうか？」
「え、ええ」
美紀子が目を丸くした。
「みち子と、鉄哉という名前で、いかがですか？」
「みち子、鉄哉か・・・」
2 人は天井を見た。そして、答えた。
「いい、名前だね。つけるよ。」
「ありがとうございます」

「じゃあ、僕は、有祈子(ゆきこ)という妹もいたらな・・・」
鉄哉の独り言に 2 人は反応した。
「いい名前・・・」
「それも、頂き！」

そして、みち子と鉄哉は 2 人に別れを告げ、喫茶店を後にした。

みち子たちが駅に向かっていると、何者かに呼び止められた。
「みち子ちゃん、鉄哉くん」
「はい？」
振り向くと、そこには樋口車掌が立っていた。
「樋口さん！」
２人と樋口車掌はお隣さん。よく遊んでいたのだ。
「88 年は楽しい？」
「うん・・・」
「でしょうね」
樋口車掌は腕組みをした。
一呼吸をおいて、みち子は言い放った。
「やっぱり・・・黒幕はあなただったのね！」
「判ってたのね」
「ええ」
「いつから？」
この問いに、みち子は淡々と答え始めた。
「あなたが私に検札に来たときよ。私は SIOCA で誤って検札に見せたわけ。それでも不審に思わないあなたを妙に思っていたのよ。それで・・・」
みち子はうつむき加減になった。
「・・・それでこのこと。ほかにもいろいろあるけど、ここまでにしておくわ」
「正解」
ただ一言、樋口車掌は言った。
「どうして、僕らを・・・」
鉄哉が聞いた。
「事故よ」
「えっ」
「本当は、回送列車を飛ばすつもりだったの。やっぱり、列車内で話すわ。こっちへいらっしゃい」
樋口車掌は 2 人を手招きする。2 人は顔を見合わせ、頷くと樋口車掌の方へ向かった。

「少し目を瞑(つむ)っていて」
言われるがまま、目をつぶる。
「いいわ」
2 人は、目を開けた。そこは、N200 系の車内だった。
「すごい」
「どうして！？」
「I'm a Time･･･」
最後の部分が、かき消された。
「すごくない？」
「うん」
「何ゆえ、だと思う？」
樋口車掌が聞く。
「さあ」
鉄哉は即答した。
「もしかして・・・未来人、タイムトラベラーとか？」
「そのとおり」
意外にあっさりとした答え方に、2 人は驚いていた。
「私が 2009 年に来たのは、あなた達が荻沢に移ってきたころのことよ。」
「そうなの」
「意外」
「・・・だから、３年前のことね。そこで、あなた達の隣の家を借りて、2000 年代の調査を始めたの。それが終わって、1988 年を調査するところで・・・」
「この事故が起こった、と」
みち子が口を挟んだ。
「そう。私は、運用や、車両の動きなど調べて、列車をタイムマシンにするつもりだったの。本来なら、この編成は今日は予備車だったの。でも、何故(なにゆえ)か運用についてしまい、お客さんを乗せてしまった」
「それで、私たち以外のお客さんは？」
「寝てる」
「どうして」
「信じてもらえない、と思ったからよ。この出来事に関する記憶も、消したわ」
「私たちも、消されるの・・・」
みち子は、悲しそうな顔をした。
「いや。始末書一枚で済むから、大丈夫よ」
「よかった」
みち子は、ほっと胸をなでおろした。

「じゃあ、帰ろうか」
「うん」
大きく、頷いた。

「第一番引き上げ線、出発進行！」
威勢のいい、喚呼(かんこ)の声とともに、列車は出発した。

そして、130km/h までスピードが上がると、列車が揺れ始めた。
「何だと分かっていても、やっぱり怖いね」
「うん」

そして、霧の中を通り、2009 年へと、戻っていった。

「指令長！」
「な、何だ？」
「列車が、列車が戻りました！」
CTC パネルを見ていた、係員が叫ぶ。
どっと拍手が起こった。大田の額からはどっと、汗が流れた。
「おい、連絡を取れ」
「了解しました」

運転室でも、桜山が帰ってきたことを実感していた。
「おっ」
無線が復活していた。すかさず連絡を入れる。
「こちら、4402K、司令室、応答願います」
『こちら司令室、4402K、列車番号を 9010K に変更の上、10 秒先行せよ』
「10 秒先行、了解。ATO、作動開始」
桜山は、ATO のスイッチを入れた。
“ ATO 作動開始 ”
無事に ATO が作動を開始した。桜山はふと、ため息をついていた。

『間もなく、2 番線に臨時・荻沢行きが参ります、危ない・・・』
美紀子は、見晴市駅のホームに立っていた。
「ピロリン！」
携帯が鳴った。メールが届いていた。みち子からだった。
「おかあさんへ　見晴市駅に来て　みち子」

そして、ホームに滑り込んできた列車から降りてきたわが子を抱きしめた。

その日の日記に、みち子はこう、書き記した。
『今日は、過去のお父さんたちに会った。かっこよかったな・・・』

樋口車掌は、桜山運転士と車庫に帰った後、忽然と姿を消したそうである。みち子たちは真相を知っていた。たぶん、これ以上騒ぎを大きくしない為に、未来に帰っただけ・・・だと・・・

そして、翌日。

ジリリリリリ・・・
「ンーッ」
「みち子、ご飯の時間よ！」
「ファーイ」
みち子は、眠い目をこすりながらダイニングへと向かった。
「今日はみち子の大好きな焼鮭よ」
「わーい」
テーブルの上には、皿が５つ、並べられていた。
「お母さん、ひとつ多いんじゃない？」
「多くないわ」
「じゃあ、誰の分なの。お父さん、お母さん、私、鉄哉と、あと、誰なの？」
母からは、意外な答えが帰ってきた。
「有祈子は？」
「有祈子！？」
みち子は目を丸くした。
「あんた、何驚いてるの？自分の妹を忘れたんかい」
「ううん、なんでもない！」
みち子は言葉を濁した。

しばらくすると、鉄哉が起きてきた。鉄哉も、同じことを言った。
「何で５つ？」
「あんた姉弟(してい)そろって妹を忘れたんかい？」
美紀子は、ため息をついていた。

そして、噂の有祈子が起きてきた。
「おはよう。あ、お姉ちゃんたちもう起きていたんだ」
「おはよう」
遅れて、父親である和夫が起きて来た。
「おはよう。今日は早いじゃないか」
「ちょっとね」

みち子と鉄哉は、顔を見合わせた。
「これって」
「歴史をすこし、変えちゃったってこと・・・」
「だよ」
「どうしよう」
どうすることもできない。

「いってきます」
「気をつけて」

2 人、もとい 3 人は、ある家の前を通る。いつの間にか、空き家になっていた。表札はついていない。
「樋口さん、やっぱり帰ったのかな」
「樋口さん？お姉ちゃん、その人、ダレ？」
「ううん、なんでもない」

そして、今日も愉快な一日が幕を開けるのであった。

おしまい

～初めての 160km/h～　作：Gordon

前夜 23 時,大原前地は大館支社から本社に転入の通知を受けた。
大原前地「なんだ,長岡に行くのか…遠い…」

大原前地は大館支社運輸課に行きた。
運輸課の皆「おはよ,大原さんは今日から本社の社員ですね。」
大原「本社は何だの気動車に運転しましょうか?(※)」
運輸課員「気動車じゃない,電車だよ,え…と,長岡本社は 12 時までに行くがいいですね。」
大原「(12 時までが…ま,いいよ),それでは行きます,皆さんさよなら」
運輸課の皆「さよなら」

新幹線料金が高いのため,大原前地は普通電車に乗る,三沢へ向いる。

三沢,11 時に到着された,ここで以前の友達,長瀬明さんに出会した。

長瀬明「大原さん,お久しぶりですね,なぜここに行きましょうか?」
大原前地「お久しぶりです,こちらは長岡本社にいくですね,走り方が教えましょうか?」
長瀬「いいよ,俺もこの列車の運転席に行きましょうか?」
※長瀬明運転の列車は E231 系 1000 番台 15 両です,
大原「この列車は長い,何両ですよ?」
長瀬「15 両です」
大原前地さんや長瀬明さんはこの列車の運転席へ行く。
何時もの長瀬はこの列車の行先、運番などを設定された。
大原「…あれ,これはなんだ?」
大原は驚いた。
キハ 30 系はツーハンドル自動空気ブレーキなのに E231 系はワンハンドル全電気ブレーキたっだ。
長瀬「すぐに発車だよ」
1 分から,車掌はドアに閉める。
長瀬「閉じ灯点,発車定時,信号 80,三沢発車」
大原「この路線の信号はないですか?」
長瀬「不要ですね,速度制限は信号だよ」
長瀬「信号 160」
大原「信号 160!これは速い!さすが大都市長岡だ!」
2 分から…

長瀬「停車場接近,北岩野通過,上り本線」
そして,すぐに高松市駅に到着する。
長瀬「停車場接近,高松市停車,2 番線,B 標あり」
長瀬「信号ばってん,ATC ブレーキよし」
大原「ブレーキ…ブレーキだ!!」
長瀬「ブレーキ使うませんが停車が可能だよ」
大原「そうか…」
高松市駅に到着する。
そして,長岡駅に到着する,
長瀬「大原さん,出口指示標は長鉄本社はありよ,では」
大原さんは本社に行く,運輸課に向ける。
大原「こんにちは,ここは本社運輸課か?」
運輸課長「そうです,そちらは大原さんか?」
大原「はい」
運輸課長「でも,ここからの 3 週は再訓練に行きますが,
今は宿舎を配置します。」
運輸課員 B「大原さん,一緒に宿舎に行きましょうか?」
大原「はい」
大原は運輸課員 B も一緒に宿舎へ行ける。
運輸課員 B「ここはそちらの宿舎,324 号ルームです」
大原「ありがとうございます。」
運輸課員 B「でも,俺は用事により,本社に帰ります。」
大原「またね。」
大原はこの新環境がまだ未適応できる。
大原「長岡市の中は何だ,市内に行きます。」
大原は歩行で長岡駅に行ける。(事実は宿舎から地下鉄線で乗るが可能か,大原さんは地下鉄駅は見てないので歩行で長岡駅に行くするのである。)
途中長瀬と会った。
長瀬「大原さん,ここはどこに行きますか?」
大原「え…と,長岡駅に行きますのです。」
長瀬「そちらは同じです,一緒に地下鉄に乗りますか?」
大原「地下鉄?」
長瀬「地下で走行の電車よ」
大原「ま,いいよ」
大原と長瀬も地下鉄駅に行きます。

～訓練～

大原さんと長瀬さんも地下鉄に乗り,市内で観光としていた。

第二日,シミュレーション運転訓練を開始していた。
「そろそろ開始しますよ。」
「はいはい。だけど,ブレーキハンドルがどこだ?見てない」
「これはワンハンドルので,ブレーキはハンドルの上部です。」
そして大原さんはノッチを上げ,訓練を続けた。
「信号がない?ああ,減速した。」
「これは ATC です,速度は信号となります」
さて,160km/hまでに加速した。
「この電車は速いですね,俺の家はこのみたい電車が見えない」
「実はこれ長岡市の主力電車です」
「そう?」
「そうです」
「いいなぁ」

シミュレーション完了から,大原さんは東島都に行けたが，途中,予告なくの事件が発生した。
「あああ」
長岡明英ちゃんがホームから軌道に転落した。
「大丈夫かの?」
「俺の足が･･･助けてください。」
大原さんが長岡明英ちゃんを軌道から救出した。
「ありがとうございます,そちらの名前は?」
「大原前地です。」
「私は長岡明英です,はじめまして」

～本当のスタート～

あの事件からの次日,
大原さんが休日のため，訓練がありませんとなった。

大原さんは東島都に行くの経験がありましたか，前回は 10 年くらいとなった。

「お久しぶりだね」

そのまま長岡駅に行きました。

『まもなく、7 番線に国沢道直通特別快速沼浜行きが参ります。あぶないですから、黄色い線までお下がりください。この列車（電車）は、4 ドア、15 両です。グリーン車は足元の数字、4 番と 5 番でお待ちください。普通車は足元の数字、1 番から 7 番、10 番から 15 番でお待ちください。』

大原さんは先頭車から展望のと思うので，先頭車の位置で待った。

列車が来た。

「行きます。」

車内で前日軌道から助けたの長岡明英ちゃん再びに会った。

「こんにちは，今大丈夫ですか？」
「大丈夫です。そちらは？」
「いいです」

列車はすぐに発車した。

『7 番線から、新快速沼浜行きが発車いたします。ドアが閉まります。ご注意ください。』

「点灯,進行,信号 160,ブレーキ緩解。長岡発車定発。長岡‐仲堅間徐行・ノッチ制限確認，徐行・ノッチ制限確認共になし。」

電車がそのまま発車した。

「長岡ちゃん,そちらはどこに行きますか？」
「学校のです。そちらはどこ？」
「東島都に行きます。」

『この電車は ER 長岡線　国沢道線直通　新快速　沼浜行きです。停車駅は仲堅･大沢･本台･品橋･新荻沢･上船町･砂嘴川･穀津･浜和良です。グリーン車は 4 号車と 5 号車です。グリーン車ご利用の際はグリーン券が必要です。次は　仲堅です。　地下鉄線はお乗換えで

す･･･』

『停車場接近,仲堅停車 3 番線,B 標あり』
『信号 30･ATC ブレーキよし』
『信号 0』
列車は仲堅に到着した。

「私はここで降ります。大原さんまたね。」
「またね。」

大原さんは注意しないとか,これは人生の転換点となる。

番外編・-長岡明英ちゃんの一日-

「ああ,遅れた！！」

明英ちゃんが寝すぎた,高松市駅までラッシュなのか,定時に高松市の家から出発した。

『まもなく、7 番線に国沢道直通特別快速沼浜行きが参ります。あぶないですから、黄色い線までお下がりください。この列車（電車）は、4 ドア、15 両です。グリーン車は足元の数字、4 番と 5 番でお待ちください。普通車は足元の数字、1 番から 7 番、10 番から 15 番でお待ちください。』

「今日は多分定時と思います。」

そのまま仲堅の高校に向きた。

「おはよう～」
「明英ちゃんおはよう」

ベルが響くたので学校開始した。

==========
今日は学校早く終わったので,化学･数学のみを授業する。

今日は学校早く終わったので,明英ちゃんが荻沢地区にいける。

『まもなく、7 番線に荻沢電鉄線直通快速愛浜行きが参ります。あぶないですから、黄色い線までお下がりください。この列車（電車）は、3 ドア、10 両です。』

到着の列車は有名な 223 系 7000 番台であるか,今日は V+J 珍編成となった。

『2 番線から、快速愛浜行きが発車いたします。ドアが閉まります。ご注意ください。』

13 時ごろので,混雑時間ではありません､先頭車の座席を乗りました。

そのまま,本台で運転士交換の光景を見てた。

この編成は荻鉄の自動放送装置がありませんので,車掌による放送される。

「お待たせしました,今日を荻沢電鉄ご利用くださいましてありがとうございます｡この電車は快速愛浜行きです｡停車駅と到着時間をご案内いたします｡途中沖広大 13 時 23 分,大具知 13 時 26 分,荻沢 13 時 32 分,川島 13 時 36 分,雨花市 13 時 42 分,花本一関 13 時 47 分,荻ノ川 14 時 5 分,終点は 14 時 25 分の到着です｡次は沖広大にとまります｡」

「まもなく大具知です｡直通快速荻沢･たわら本郷台方面 13 時 35 分発田原臨海副都心行きは階段に 5 番線です,大具知の次は荻沢です｡」

「まもなく荻沢です｡荻沢港線普通電車荻沢港行きは 11 番線から 13 時 40 分発です｡荻沢の次は川島です｡」

無事に荻沢到着した｡しかし,A-CARD がエラー発生したのため｡駅員で精算した｡今日の駅員は元高松市駅から転属（転社）の田崎さんです｡

「運賃 730 円です」
「はい,え･･･今日は美並競艇場でレースがありますか？」
「そうですね｡国際大会のです」
「ええ,私は美並競艇場行きます」
「150 円です」
「はい」
「ありがとうございます｡またね」

今日の大会は人が多いので,座れませんとなった。

「もう立ちます。」

そろそろレース 1 を開始した。

「東山さんがんばれ。」

東山さんはやはり苦戦したのか,最後はあのレースの勝者となった。

明英ちゃんは 18 時まで観戦する。荻沢駅前でご飯をたべた。

「そろそろ,家に帰ります。」

レストランで荻沢みち子と会った。

「え・・・これはそちらの携帯ですか？」
「はいです。」
「そちらは競艇場で携帯を忘れた」

確かに,明英ちゃんは競艇場で携帯を忘れた。
「ありがとうございます,そちらの名前は」
「荻沢みち子です,よろしくお願いします」
「私は長岡明英です,よろしくお願いします」

荻沢駅で電車を待った。

20 時ごろで家に帰った.

「ただいまー」
「おかえりなさい」

明日は休日ので長岡明英ちゃんはゲームを遊び,1 時ごろで寝てた。（以下本文無し）